

國學院大學学術情報リポジトリ

古代・中世移行期の交通路と熊野王子社の成立背景：
窪津王子を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高橋, あかね メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001527

古代・中世移行期の交通路と熊野王子社の成立背景

―窪津王子を中心に―

高橋 あかね

論文要旨

九世紀から十二世紀頃は、古代から中世への移行期であり、神道においても転換期である。この背景として様々な要因が推測されるが、近年、その一つに環境変化の影響も指摘されている。

本稿では、地形・環境の変化を視野に入れて、古代・中世移行期の神社立地について検討する。その際、中世隆盛する熊野参詣路の起点である上町台地北端部周辺に注目した。

結果として、十世紀末まで舟運が可能であり、大阪湾への通過地点であった当地域は、熊野参詣がはじまる十一世紀末までに、土砂堆積が進み舟運が困難となったと考えられる。その後、上陸地点となり、水陸交通の結節点へと性格が変化し、熊野参

詣路の起点となったことを確認した。そして十二世紀後半には熊野王子社である窪津王子が成立し、その位置は渡部別所との関係から台地下であることを指摘した。

窪津王子が成立する背景には古代に存在した港湾の神が想定でき、難波津の環境変化が大きく影響しているとともに、熊野参詣路の成立にも関わってくるといえる。これは、中世熊野信仰への転換の一例として捉えることが可能である。

【キーワード】「難波津」なにわづ「環境変化」かんきょうへんか「熊野王子社」くまのおうじしゃ「渡部別所」わたなべべつしよ「港湾の神」こうわんのかみ

はじめに

難波（渡辺・窪津）¹は古代・中世を通じて交通の要衝として重要性の高い土地であった。上町台地を中心に難波宮や摂津国府など政

治的な建物が設置されたほか、国家的な港湾である難波津が存在し、また、四天王寺や住吉社（現在の住吉大社）など神道や仏教に係る建築物も多く、大阪平野における信仰の中心地でもあった。

難波では古代、仏像を難波堀江に流したり、有事の際にわざわざ祓禊しに行ったりするなど、京の人々にとって祓の場としての共通認識があったとされる。平安時代に入ったあとも難波では八十島祭や斎王が帰京した際の祓がおこなわれており、宗教の側面から見ても重要性の高い場所であった。

院政期以降、難波の地は上皇や貴人によって繰り返される熊野・高野山・四天王寺・住吉社などへの社寺参詣によって、水陸交通の結節点として多くの参詣記に名前が記されるようになっていき、その中でも特徴的なのが熊野参詣である。

熊野参詣とは延喜七年（九〇七）におこなわれた宇多法皇の参詣をはじめとし、白河上皇の二回目の熊野参詣である永久四年（一一一六）を画期として、院政期以降、上皇や貴人、庶民など多くの人々が熊野へと詣でたことを指す。熊野は、当時広まっていた末法思想により浄土信仰や、神仏習合の影響を大きく受け、現世における浄土と認識された。また『神道集』の「熊野の本地」などで苦しむ神が描かれ、それが人々の苦しみを背負う衆生擁護の神と観念されるなど、古代における氏神を対象とした信仰とは異なる特徴を持つ。

熊野参詣では原則徒歩で本宮（現在の熊野本宮大社）を目指し、その参詣道中では参詣者に同行した先達の指示により、祓や奉幣などの儀式をおこなっていた。おこなわれた儀式の中には、道中の王子社への参詣、奉幣などがあり、熊野参詣において王子社の存在は欠かせないものであった。

船から降りる地点であった渡辺には、王子社の中でも最初に参詣者が詣でる「窪津王子」が見えるようになる。

熊野王子社は、渡辺から目的地である本宮までの道中に総数としては百社を超えて存在した祠などを指す。その淵源は多岐にわたり、それは道祖神のようなものや、叢祠や樹叢など、王子社ごとに異なるものを持ち、その地にあった在地の神などを熊野信仰の中に位置づけたものであると考えられる³。では、窪津王子の淵源は何に求められるのか。本稿では古代から中世へと変化する景観や神観に注目しつつ、窪津王子の淵源について検討することを目的とする。また、同時期に重源によって建てられた渡部別所と窪津王子とのかかわ

りから、窪津王子社の位置の再考についてもおこなう。

一、窪津王子の概要

熊野参詣についてももう少し概要を述べると、その特徴は原則徒歩で目的地である本宮を目指したことにある。それは『梁塵秘抄』に所収された「熊野へ参らむと思へども、徒歩より参れば道遠し、すぐれて山きびし、馬にて参れば苦行ならず、空より参らむ、羽たべ若王子」という歌からもうかがうことができる。徒歩が重視された背景には、参詣者を導いた先達の影響が強く、吉野や大峰など険しい山中において峰をたどっておこなわれていた修行が熊野参詣の道中に持ち込まれたと考えられ、窪津王子はその陸路の起点にあたる上町台地西北端部付近に存在した。

その窪津王子（渡辺王子）は、『吉記』承安四年（一一七四）に吉田経房がおこなった熊野参詣の記録で初めて確認ができる。⁴

廿一日乙巳、自^二昨日^一雖^レ有^二陰氣朝霽^一、今日進^二発熊野^一、出^二七条^一、經^二造路^一、先達定宗闍梨、房州等、相伴侍七人、盛職朝臣、範清・盛佐・敦澄・忠繼・盛業・景光、上下相并百卅余人、於^二鳥羽南楼^一乗^レ船、卯終参^二詣八幡^一、房州依經服不参於^二木津殿^一昼養。此間雨下、黄昏参^二着渡辺王子^一。秉燭之後着^二天王寺^一、經尊法眼儲^二宿所^一。念仏堂執行送^二酒肴^一。

今夜有^レ夢、公卿兩^三前大・新源中^二抱^一小兒^一、若是若王寺歟、（子）急々如律令、

吉田経房は京を出発し、鳥羽殿の南楼から船に乗り込んで淀川を下っており、途中石清水八幡宮に詣でつつもその日の夕方頃には窪津王子に到着したようである。京―鳥羽殿―石清水―窪津―四天王寺をたどるこのルートは、院政期の熊野参詣において一般的に用いられたものである。

この時の参詣では、王子社でどのようなことがおこなわれたか特に記述はないが、淀川を下って船を降りる場所からさほど離れてい

ない場所にあるのが、この窪津王子であった。

これより後の参詣記にも引き続き窪津王子は登場し、特に建仁元年（一二〇一）の『後鳥羽院熊野御幸記』⁵や建保五年（一二二七）の『後鳥羽院・修明門院熊野御幸記』⁶では、それぞれ当時窪津王子社頭においておこなわれた儀式の詳細について知ることができる。

『後鳥羽院熊野御幸記』建仁元年十月五日条

五日、天晴（中略）

騎馬出^一木津殿方^一、人々昼ヤシナヒ、打^二屋形御所^一之儀等如^レ例嚴重、予最前乗^レ船下、解^二衣裳^一及^二一寝^一、^{著本半}申始許著^二クホ津^一、^{先達次第申可融之由}拜^二王子^一、人々前後会合、良久御船著御、御奉幣、^{先約、仍不相具}上下乱舞、宿老人々已前退出、即騎馬馳奔、（後略）

『後鳥羽院・修明門院熊野御幸記』建保五年九月三十日・十月二十五日条

三十日甲辰、天晴（中略）

女院御船付^二木津殿^一、卿^二品被^レ進^一御養於御船^一之故也、予於^二御船^一構^レ養、^{参入}二品儲^レ之、左衛門督・予・以康・信経、依^二院仰^一候^二御船^一、申刻著^二窪津^一、出御^二被^二院御幸^一、且依^レ仰也、^{両方}小時御先達僧正并御船等著、^{著御}先上皇参^二御王子^一、次女院下御、御興奉^レ昇^二入拜殿内^一、左衛門督・忠嗣朝臣候^レ之、後方上北面奉^レ昇^レ之、^{参入}次奥^等於並^二居拜殿後^一、^{（傍力）}牟志笠女房候^二拜殿^一、^{隆承律師、聖覚代官}先院御奉幣・御経供養・里神楽、次女院御奉幣、予伝^レ幣、次御経供養、次里神楽・馴子舞混合、重長朝臣舞^二白拍子^一、天^二無双^一舞所^レ被^二召具^一也、可^レ謂^二珍重^一、按察守^レ仰一向致^二沙汰^一所^二相具^一也、（中略）

廿五日、天晴、（中略）

抑渡部御船并国々召^二船府^一鵜船等、自^二前日^一宗奉行人主典代・庁官下著所^レ沙汰儲^一也、御進発時所^レ進之船等皆所^レ進也、（後略）

後鳥羽上皇によるこの二回の熊野参詣でも、川下りの後、船を降りてすぐに窪津王子に詣でており、下船地点から近い場所にあったことが予測される。それと同時に奉幣のほか、御経供養や里神楽、馴子舞などが催される場であったことが分かる。

このように熊野への起点に位置する王子社として、参詣記にも記される窪津王子であるが、その名前が史料上に現れるようになるのは、『吉記』で確認したように承安四年以降であり、王子社初見の永保元年（一〇八二）や、複数の王子社が見え始める天仁二年（一一〇九）などから少し遅い。しかし、承安四年以前の熊野参詣にも窪津と同じ地をさす地名が見えることから、一貫して京から淀川を下り、上陸する地点として参詣路の中でも重要性の高い場所であると考えることができる。ここで窪津王子の淵源には、交通の要衝であるという土地の性格が大きく影響している可能性を想定してみたい。

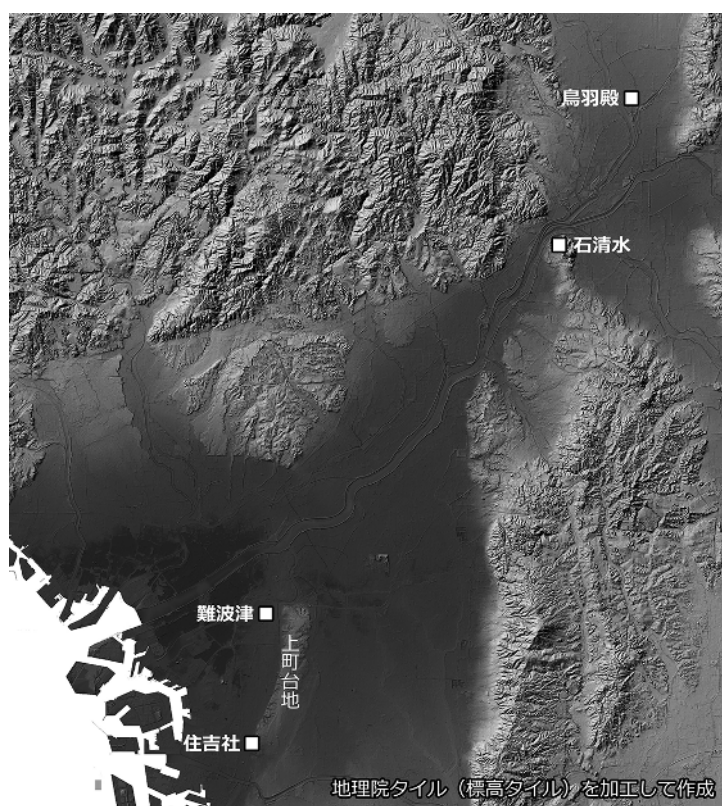
既に述べたように、王子社とは紀伊半島西側に沿うように立地する小規模な社などである。これまでの研究ではその淵源を、熊野三山を遥拝するためのものであるとする説や、叢祠・樹叢などであるとする説、道祖神や手向けの神であるとする説など様々に展開しているが、多くがその淵源を王子社全体に適用する考えであった。しかし、王子社が窪津から本宮までという長い道中で各地に存在し、またそれぞれが史料で確認できる年代に差があることから、一概にすべての王子社が同じ淵源を持っていたとは考えづらい。

以前の研究で、いくつかの王子社を比較し、それぞれに淵源が違ふことを確認しており、また淵源を考える際には王子社が位置するその場の歴史を考えることが重要であることを述べた⁸。これは窪津王子にも同様に言えることであり、次章以降、古代から中世を通じた場の連続性を踏まえて窪津王子の淵源について検討をおこなう。

二、古代難波の景観と窪津王子の淵源

窪津王子が位置する難波は、古くから交通の要衝として重視されてきた場所である。

現在の難波は大阪市を中心とした範囲であり市街地が広がる。明治の大規模な治水事業がおこなわれる以前は淀川の流路が現在より蛇行しており、現在の景観とは異なるものであった。古代の難波は『日本書紀』仁徳天皇十一年に「郊沢曠遠、而田圃少乏、且河水横



(図1) 難波周辺地図

逝、以流末^レ駛、聊逢^ニ霖雨^一、海潮逆上、而巷里乘^レ船、道路亦泥^一とあるように、もともと河川の洪水や、高潮によって道路まで泥に埋まるような、水害の影響を受けやすい低地が大部分を占める土地であった(図1)。

水害を多く受けながらも、難波の堀江が開削されるなど古くから治水事業が繰り返しおこなわれ、難波では上町台地周辺を中心に栄えた。

五世紀後半には台地上に法円坂倉庫群が存在し、倉庫群が廃絶した後も難波宮下層遺跡から集落遺跡が発掘されたように、上町台地北端部では人々の活発な営みが認められる。またその後も前期難波宮、後期難波宮と継続して都城が置かれ、政治的に重要な意味を持つ土地であった。また台地北端部周辺の低地には、難波津と呼ばれる国家的な港湾施設が存在し、各地との交通・流通の拠点として、難波において特に重要な場所とされていた¹⁰⁾。この港湾施設である難波津は古代以降も

継続し、中世における渡辺津の前身でもあったと考えられている。ここでは港湾施設としての動きに注目して、いくつか史料を挙げて古代難波津の景観について考えてみたい。

まず注目されるのが『日本後紀』大同元年(八〇六)八月壬子条の「遣^レ使封^ニ左右京及山崎津・難波津酒家麴^一、以^ニ水旱成^レ災、穀米騰躍^一也、^一という記述である。これによると、この時期大規模な旱魃があり、米価が高騰したため、米価抑制のために米を酒米に転用することを禁止した。その際、主要な酒造地域の酒麴を封じたという。ここでは左右京と山崎津に並んで難波津が挙げられている

ことが重要であり、平安京やその外港である山崎津という大きな物流の要所と並んで難波津は米が集まる場所であった。

次に、難波津周辺に存在していた貴族たちの「宅」を確認する。難波津の周辺には奈良時代の藤原豊成の宅をはじめ、貴族たちの経済活動の拠点として展開しており、上町台地北端部周辺である難波の大川沿いに集中していたとされる。この「宅」は西国との水上交通の拠点として用いられた¹¹。八世紀、難波堀江周辺では貴人たちの「宅」以外にも東大寺などの大寺院、他にも遠距離交易者の中継基地として利用されていたと指摘されている¹²。

「宅」について具体的な例を挙げると、承和十年（八四三）、謀反の罪で流罪となった文室宮田麻呂の「難波宅」がある。宮田麻呂は平安京のほか、難波にも「宅」を所有しており、『続日本後紀』承和十年（八四三）十二月二十四日条に記されている。

禁^三告者氏雄于左近衛府^一、勅使等所^三搜得^一宮田麻呂京宅兵具、弓十三枝、胡録三具、箭百六十隻、劔六口、難波宅兵器、胄二枚、零落甲二領、劔八口、弓十二張、胡録十具、杵三柄、棄^三置于右近衛陣^一、

京宅と並んで、難波宅には多くの私有兵器が置かれており、難波宅が宮田麻呂にとって重要な役割を持っていたと推測できる。戸田芳美氏はこれと合わせて宮田麻呂が新羅人と交易をおこなっていたことを挙げ、難波の宅を中継基地として活発な経済活動がおこなわれていたと述べた¹³。難波津は淀川交通を介する内陸交通だけでなく、西国諸国や外国との交易の場という国家的な港湾としての働きをしていたと言える。

上町台地北端部を西方に降りた砂州からは奈良時代末から平安時代初頭の遺物が多く出土しており、松尾信裕氏は、この一帯から出土した遺跡には貴族たちの「宅」と同じような性格の遺跡も含まれる可能性を示しており、この集落が中世の渡辺に継続すると推測している¹⁴。

当時の景観は『万葉集』にも伝えられている。巻二十の大友家持の歌には「堀江漕ぐ伊豆手の舟の梶つくめ音しば立ちぬ水脈速みかも（四四六〇）」「堀江より水脈浜る梶の音の間なくそ奈良は恋しかりける（四四六一）」「舟競ふ堀江の川の水際に来居つつ鳴くは都鳥かも（四四六二）」など難波の景観を伝え、難波津に多くの舟がひしめき合っていた情景が想像できる。

以上確認してきたように、各地域から物が集まる難波津は、国家的な港湾として機能していた。

このような港湾など交通の要衝には、古代から神の存在が観念された。

古代の人々は、交通に適した地形や自然環境に神を見出し、そこで神を祀る「坐す神」という神観を持っていた。¹⁵ 笹生衛氏は代表的なものとして上町台地の南部に位置する住吉神社（現在の住吉大社）を挙げている。『日本書紀』神功皇后摂政元年二月条、祭神の住吉三神の託宣では「亦表筒男・中筒男・底筒男三神誨之曰、吾和魂宣^レ居^レ大津渟中倉之長峽」。便因^レ看^レ往来船^一。」とある。「大津渟中倉之長峽」は住吉神社が位置する場所を指し、そこに居れば往来する船を見守るとする内容である。舟運は古代の人々にとって重要な交通手段であり、港湾に適し、水陸交通の結節点となる場所に船を見守る港の神を感じ、港湾と舟運を見守る神を祀ったという。¹⁶

難波津も京と西国諸国、南海道などとの物流を結ぶ地点であり、国家的な港湾として重要な場所であった。難波津の交通の要衝という環境にも、同じように人々が往来する船の安全を神に期待していた可能性は高く、難波津の近くに港湾を見守る神が祀られていたことも想定すべきである。

古代、上町台地西裾のラインにはラグーンが発達しており、発掘調査から複数の祭祀遺物が報告されている。この範囲に該当する現在の大阪市中央区道修町にあたる場所は、港湾施設が存在したと予測されている地点の近くでもあり、古墳時代後期から平安初期までの須恵器や土師器が出土している。土師器には墨書土器や人面墨書土器が含まれており、祭祀がおこなわれていたとされる。¹⁸ また、同じラグーンの水域内、道修町から二キロほど南下した場所にある住友銅吹所跡からも、七世紀の舟形木製品が出土しており、航海の安全を祈る祭祀に用いられたと考えられている。²⁰ 付近から神社遺構は見つかっていないものの、このラグーン周辺に港湾施設が存在していたことと合せて考えた場合、難波でも港湾に坐す神が祀られていた可能性が指摘できる。

次の三章でも触れるが、類似した景観を持つ例として、滋賀県の塩津港遺跡が挙げられる。同地では古代から続く港湾施設が存在が確認されており、またその近くには港湾の神を祀る塩津神社の遺構が存在する。²¹ 塩津は京と東北諸国を結ぶ交通の要衝であり、港湾施設を伴っていたことが発掘調査から明らかにされており、その景観は難波と近いものであったと言え、塩津港の近くに神社が存在した点は注目すべきである。

ここまでの検討をふまえ、王子社の淵源が古代から連続するものであると考えた場合、窪津王子の淵源には港湾に坐す神のような港湾を見守る神の存在が想定されるのではないだろうか。このような港湾に座す神が、熊野信仰という中世的な信仰の中に組み込まれ、熊野の御子神が勧請されるなどした結果、窪津王子につながっていくと考えたい。

しかし、問題点として難波津の近くには先に挙げた住吉神社もあり、なぜ窪津王子は上町台地西北端部に位置したのか、さらに検討する必要がある。

三、環境変化と熊野参詣路・窪津王子の成立

本章では、二章の内容を踏まえて難波の環境変化を中心に、窪津王子が史料上に現れるまでの過程を確認していきたい。

窪津王子がはじめて史料に現れる十二世紀を含め、九世紀後半から十二世紀頃は気候変動により、地形が大きく変化していった時代でもあった²²。古代では船を降りずに淀川から大阪湾へと通行可能であった難波の位置する淀川河口部で、繰り返し返される洪水などにより、土砂が河口部に流出し陸化が進むことは難波の交通体系にきわめて大きな影響を与えた。この環境変化は窪津王子が難波に立地する理由とも重なって考えると考えられる。また、熊野信仰が隆盛した要素として挙げられる末法思想の広がる背景にも環境変化が指摘され²³、神社の古代から中世への変化について検討するうえで重要な視点であると言える。

最初に古代、大阪湾と淀川の間を通過し、そのまま遡上できたことは、『日本書紀』仁徳天皇三十年に確認でき、当時の淀川交通の景観を伝えるものでもある²⁴。

時皇后到^三難波^一、聞^三天皇合^二八田皇女^一、而大恨之、則其所採御綱葉投^二於海^一、而不^三著岸^一、故時人号^二散^レ葉之海^一、曰^三葉^レ濟^一也、爰天皇不^レ知^三皇后忿不^二著岸^一、親幸^二大津^一、待^三皇后之船^一。

(中略)

時、皇后不_レ泊_二于大津_一、更引之遡江、自_二山背_一廻而向_レ倭、

(中略)

皇后不_レ還猶行之、至_二山背河_一而歌曰、

船で戻る途中、難波済で仁徳天皇が八田皇女を召し入れたことを知った磐之媛は、これを大いに恨んで着岸せずにそのまま淀川を遡上していったという。この後詠まれた歌が「つぎねふ 山背河を 宮遡り 我が遡れば 青丹よし 那羅を過ぎ 小楯 倭を過ぎ 我が見が欲し国は 葛城高宮我家のあたり」とあるように、さらに磐之媛は川を遡上して最終的に葛城まで戻っている。内容としては伝承であるが、この記述から、大化前代の難波では船を降りることなく外海から河川を遡上して交通が可能であったことが確認できる。

ここから気候変動の激しくなる九世紀末頃の間には、別の要因で土砂堆積が目立つ時期があった。まず七世紀になると、日本では都城や大寺院などの建築が相次ぎ、それに伴い淀川上流域や支流域で建築木材として大量の伐採がおこなわれていた。同時に大量の瓦や土器生産のために粘土も採掘されたと考えられ、周辺環境が一変したという。²⁵

このような大量の森林伐採、粘土採掘は森林の地盤が弱くなる要因となり、雨による土砂災害を引き起こしやすくなる。結果として、淀川や大和川に大量の土砂が流れ込むこととなり、難波津を埋めて浅瀬となってしまう原因の一つとなった。

この後の十世紀では乾燥傾向が顕著であり、全国的に旱魃が長期間続く中、突発的な洪水が繰り返して発生していた状況であったことが明らかにされている。²⁶ 難波でも延喜十四年(九一四)、²⁷ 延喜十八年(九一八)、²⁸ 延長七年(九二九)、²⁹ 永祚元年(九八九)³⁰ にそれぞれ洪水に関する記述が確認でき、洪水による土砂の堆積が十世紀を通して続いていたことが推定される。この気候変動による影響を大きく受け、河口部の陸化も徐々に進んでいく。

十世紀に景観が変化した実例として挙げられるのが、延長五年(九二七)に成立したとされる『延喜式』雑式の「難波津条」である。難波津条の内容は「凡難波津頭海中立_二濬標_一、若有_二旧標朽折_一者、搜求拔去、」とあり、難波津に濬標を立てることが規定され、さらに濬標が古くなった場合にはそれを抜き去るように定められている。濬標とは水路において他の場所より水深が深い地点との間に設置

されたもので、航行の目安となったものである。土砂の堆積により難波の海が航路の指標が必要とされるほど浅瀬になり、船が座礁する危険性が増したことを示している。

それは『延喜式』玄蕃寮式「新羅客条」においても、蕃客が難波に船で訪れた際は、摂津国の人が船を迎え、水脈を先導したとあることから、水路の難所化が進んでいると言える。

また、湊標を目印として淀川河口部を使用していたことは、同時期の文学作品からも求めることができる。『土佐日記』では、承平五年（九三五）に紀貫之が土佐国からの帰路を船で辿っている道中の景観が描写されている。

六日、湊標のもとよりいで、難波につきて、川尻にはいる。皆人々、媼、翁、額にてをあて、喜ぶこと二つなし。

先学においてもすでに指摘されているように、六日条にみえる「川尻」とは、航路から考えた場合、三国川の河口部ではなく、淀川河口部を指す³¹と考えられ、前日に住吉を船で通過した紀貫之は湊標をたどりつつ難波に到着している。

『土佐日記』ではさらに翌日の七日条で、「今日、河尻に船入り立ちて、漕ぎ上るに、川の水乾て、悩み患う。船の上ること、いと難し」とあり、淀川の水位が下がっていることから十世紀における乾燥傾向の一端をうかがうことができる。

『源氏物語』の湊標巻や『栄花物語』での上東門院藤原彰子も住吉参詣の際、船に乗ったまま直接住吉社に参詣しており、これらは文学作品ではあるが、当時一般的に認識されていた情景として捉えることができ、淀川を利用した参詣の通例と考えることができる。³²

十世紀頃における難波津は、土砂の堆積により湊標など手引きが必要となり、舟運が難しくなる時期ではあるが、京から船でそのまま直接大阪湾に出て通行することが可能であった時期と考えられる。

続く十一世紀は、十世紀と比べ乾燥傾向は落ち着いたものの、九世紀末から続いた気候変動により、難波の景観は古代と全く異なるものへと変化する。

同時期には淀川流域全体で川の水位が下がった様子が記され、淀川河口部以外に上流部にあたる淀川水系の鴨川でも、十世紀から

十一世紀にかけて河床面の低下進行がみられたほか、長元五年（一〇三二）には旱魃により難波を含め、山崎、宇治川などを徒歩で渡ることができたほど川の水が少なくなった様子が『日本紀略』に確認できる。この時の旱魃はおよそ半年間にわたり旱魃が続いていたことが記される。³⁴

從^二去^一二月^二至^一今月^二大旱。山崎・摂津大江渡・宇治川等、步行往還。

一方、長元五年に半年以上続いた旱魃の二年後である長元七年八月には洪水による被害があった記事がみえ、九世紀末以降の気候変動が継続しているといえる。³⁵

参詣では、永承三年（一〇四八）に藤原頼通が高野山参詣を行っており、淀川を下る際、河川の水量が乏しく、参詣の前準備として水の流れを元に戻す作業がおこなわれている様子が見える。³⁶

画折敷并
別高坏等不^レ経^二幾程^一令^レ給、河水甚浅、往還停滯之由、依^レ有^二其聞^一、兼遣^二大藏録重高^一、召^二便宜人夫^一、令^レ掘^二浅瀬^一、尋^レ流令^レ立^レ標。就中、乳牛牧前、水絶瀬改、弥有^二往還之煩^一。而江口瀬間、以^レ葦拵^レ垣、積^レ柴作^レ堰、河流決移、已如^二旧跡^一。

頼通の高野山参詣では主な交通手段として船が各所で使用されるが、この頃から徐々に渡辺で船を降りる記述が増えるようになり、同地での交通環境が変わったことを示す。

当時の環境変化は上町台地周辺で行われた柱状対比図³⁷からも推測できる。それぞれ上町台地西側の砂州で行われた調査であり、⑥の水域部分にあたる道修入江（OJ92-1）では古代から中世にかけて自然堆積層が厚くなっていることから土砂の堆積が進んだことが分かるほか、⑦の砂州A部（OS11-16）では古代から中世の層に氾濫堆積層が重なっており、洪水が繰り返され、土砂が堆積した様子が確認できる（図2・3）。

(表1) 社寺参詣記に見える難波付近の地名

年	元号	月日	参詣者	経路	目的地	主な資料
1023	治安3年	10月28日	藤原道長	※帰路、四天王寺→(国府大渡下→田養嶋→江口→山崎岸辺)→関外院	高野山	扶桑略記
1035	長元8年	5月		京→(淀津→夫山前)→石清水→(山崎橋→江口→熊河岸)→住吉社→住吉社→(大渡→鳥飼御牧→鴨河尻)	住吉	長元8年五月十六日関白左大臣頼通歌合
1048	永承3年	10月	藤原頼通	(淀渡→山崎南岸→乳牛牧前→江口→長柄橋下→熊河→住吉浜): 天王寺→熊川御宿→(淀→鳥飼御牧→江口→山崎→淀)	高野山	宇治関白高野山御参詣記
1081	承暦5年	3月	藤原師実	(淀津→大渡)→住吉南浜: 住吉南浜→(江口→山崎)→三条家	住吉南浜	帥記
1081	永保元年	9月	藤原為房	桂川→(今山崎→三嶋江→大渡)→天王寺→住吉社	熊野	為房卿記
1084	応徳元年	9月	藤原師通	大渡→住吉→天王寺→浜路→大渡	四天王寺・住吉	後二条師通記
1090	寛治4年	8月	藤原師通	朱雀門大路礼橋下→羅城門→(鴨河尻→八幡→): 淀→鴨河精進所	金峯山寺	後二条師通記
1109	天仁2年	11月	藤原宗忠	※帰路、住吉社→浜路→天王寺西海辺→(窪津→大羽→楠葉御牧)→大舍人頭鳥羽宅	熊野	中右記
1143	康治2年	8月	藤原忠実 夫妻、頼長	(→窪津)→御西大門→天王寺: 西門→(窪津→鳥飼)	四天王寺	台記
1146	久安2年	8月、9月	鳥羽法皇、 藤原頼長	鳥羽→(南川原→窪津)→天王寺西門鳥居: 西鳥居→(窪津→山崎)→桂殿(→鳥羽南津)	四天王寺	台記
1147	久安3年	5月	仁和寺覚 法法親王	※帰路、木寺房→(梅津→鴨河尻→窪津)→(住吉前浜→日根湊): (日根湊→住吉前浜)→(大渡→江口→真手→山崎)→仁和寺木寺南房	高野山	御室御所高野山御参籠日記
1147	久安3年	9月	鳥羽法皇	(鳥羽西→柱本辺→宮柱津)→天王寺: 天王寺(→鳥羽北殿)	四天王寺	台記
1148	久安4年	4月	覚法法親 王	(桂河五条之末→鴨河尻→住吉之浜→日根之湊)→新家庄: 粉河宿→壱崎→新家庄→(日根湊→窪津→山崎)→仁和寺	高野山	御室御所高野山御参籠日記
1148	久安4年	4月	藤原頼長、 藤原忠実	(→大渡)→西門→天王寺: 浜路→(大渡→三嶋江→)	四天王寺	台記
1148	久安4年	閏6月	覚法法親 王	仁和寺→(五条桂河→窪津)→松原庄: 新家庄→(日根湊→住吉辺)→(大渡・渡辺→山崎)	高野山	御室御所高野山御参籠日記
1148	久安4年	9月	鳥羽法皇	鳥羽→(鴨河尻→柱本辺→大渡)→天王寺	四天王寺	台記
1149	久安5年	4月	覚法法親 王	木寺房→(五条末→高島→窪津)→天王寺→(住吉前→大津湊)→新家庄: 新家庄→(日根津→堺)→(渡辺→山崎)	高野山	御室御所高野山御参籠日記
1150	久安6年	6月	覚法法親 王	仁和寺→(梅津→)天王寺→(住吉前津→新家庄): 新家庄→(日根津→住吉辺)→天王寺→(窪津→山崎)→仁和寺	高野山	御室御所高野山御参籠日記
1150	久安6年	9月	鳥羽法皇・ 美福門院	京(→大渡)→天王寺: 天王寺→(大渡→富嶋→)宇治	四天王寺	台記
1151	仁平元年	3月	藤原頼長	(鳥羽南津→大渡)→浜路→住吉: 住吉前→(大渡→今津辺)	住吉	台記
1152	仁平2年	9月	鳥羽法皇、 高陽院、 美福門院	(鴨河尻→大渡)→天王寺: 天王寺→(大渡→山崎): (鴨河尻→)天王寺: 天王寺→(大渡→富嶋→鴨河尻)	四天王寺	台記補遺
1157	保元3年	9月	中山忠親	(草津→窪津)→天王寺西門→江口	高野山	山槐記
1174	承安4年	9月	吉田経房	(鳥羽南津→渡辺王子)→天王寺	熊野	吉記
1180	治承4年	8月	藤原定長	< 神崎渡→窪津>→天王寺→多武峯	多武峯	山槐記
1187	文治3年	7月	九条兼実	宇治<→窪津)→天王寺: 天王寺→(渡辺→淀渡)→冷泉亭	四天王寺	玉葉
1188	文治5年	5月	後白河法 皇	(草津→窪津)→天王寺	四天王寺	玉葉
1195	建久6年	3月	源頼朝	洛中→(鳥羽→渡部)→天王寺	四天王寺	吾妻鏡
1201	建仁元年	10月	後鳥羽上 皇、藤原 定家	(鳥羽南門→木津殿→窪津)→窪津王子→坂口王子→コウト王子→天王寺→: 住吉→天王寺→ナガラ宿(→鳥羽)	熊野	明月記
1210	承元4年	4月	修明門院	美豆浜→石清水(→渡部)→大渡王子→坂口王子→郡戸王子→天王寺: (渡部→江口→水無瀬殿→)	熊野	修明門院熊野御幸記
1210	承元4年	5月	四辻頼資	(東川→渡部)→天王寺	熊野	頼資卿熊野詣記
1216	建保4年	3月	四辻頼資	(草津→木津殿→八幡→)天王寺	熊野	頼資卿熊野詣記
1217	建保5年	6月	四辻頼資	柱下→(渡部→)	熊野	頼資卿熊野詣記
1217	建保5年	9月	後鳥羽上 皇、修明 門院	(木津殿→窪津)→窪津王子→天王寺→住吉社→: 長柄御所(→水無瀬殿→)	熊野	後鳥羽院・修明門院熊野御幸記

【凡例】() は水運使用範囲、<> は水運使用が想定される範囲、: は往路と復路の境、下線は渡辺を示す。

『籠日記』には、久安三年（一一四七）から同六年にかけておこなわれた参詣の様子が記録され、道中の経路が詳細に記されている。

毎回の参詣で、桂川から窪津間で水路を取っており、ほぼ同じ経路が用いられていることが分かるが、例外として久安四年に行われた参詣の帰路では大阪湾から船に乗ったまま窪津を通過している。³⁸

卅日丁巳、立^二粉河宿^一、於^二填崎^一、下^レ船乗^レ輿。申刻着^二新家庄宿^一。

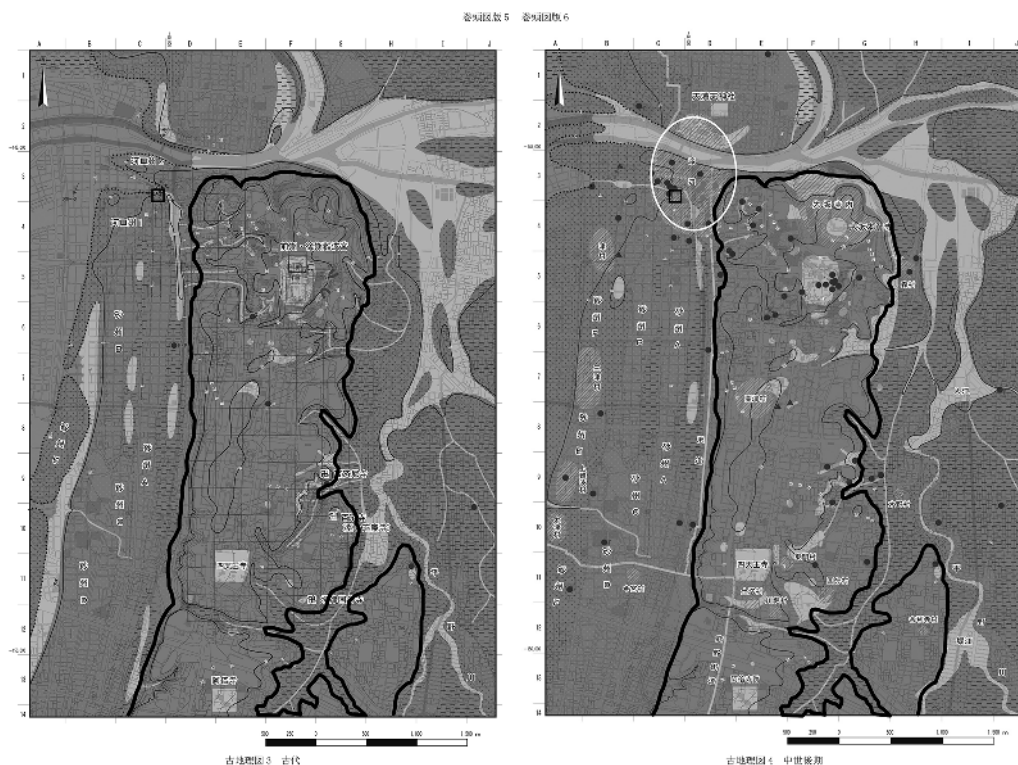
五月一日戊午、立^二新家庄宿^一、於^二日根湊^一乗^レ船。乗^レ燭之程、到^二着窪津^一。今日依^レ無^二風波之難^一、廻^二熊河尻^一着^二窪津^一了。両相公等迎來。

このとき船に乗ったまま渡辺まで進むことができたのが「今日依^レ無^二風波之難^一」であつたため、とされていることを考えると、普段は大阪湾から渡辺まで船で入ることは難しい状態であると推測できる。発掘調査などを基に作成された古地理復元図³⁹でも上町台地西北端部の陸化が進み海岸線が遠くなった様子が見受けられ、当時の景観と一致すると考えて良いだろう。

こうして七世紀、八世紀の森林伐採による森林の保水力の低下、九世紀末から十二世紀にかけての気候変動による環境変化という長期間にわたる大量の土砂堆積により、淀川河口部の地形は大きく変化した。そして、古代、淀川と大阪湾をつなぐ水運の通過地点であつた難波は、港湾施設という性格を保ちつつも窪津王子の初出である承安四年（一一七四）までに、水路と陸路をつなぐ交通の結節点として景観が変化していった。

ここまで主に十世紀から十二世紀までの環境変化を見てきた。それぞれ①九世紀頃まで…大阪湾―淀川間の通行可能であつた時期、②十世紀・十一世紀…土砂堆積による浅瀬化が進みつつも交通可能であつた時期、③十二世紀以降…浅瀬が陸化し、下船地点として水陸交通の結節点となる時期に大別することが可能であり、王子社は③の時期に該当する。

詳しい検討は今後の課題となるが、熊野参詣路は、この淀川河口部が陸化したことによって成り立つと言え、同じく窪津王子がこの



(図4 古代・中世後期の古地理図) 註34文献の図版に加筆して作成

場に立地したことも同じ理由に求められる。窪津王子の淵源が港湾に坐す神であると仮定した場合、王子社が上町台地北端部周辺に鎮座した背景には、ここまで見てきた古代から中世の難波という場の歴史が大きく関わっている可能性が指摘できる。

本稿ではもう少し踏み込んで、窪津王子の詳しい所在地について考察をしてみたい。

窪津王子は現在、その旧社地として上町台地上にある坐摩神社行宮が充てられている。しかし、この場所が推定された理由には近世の船着場である八軒屋が中世の渡辺と同じ場所であったと考えられていたためであり、本稿でも示したように近年渡辺の位置が台地西側の砂州上に求められていることから、この窪津王子の所在地についても再検討をおこなう必要がある。

窪津王子の立地を検討する際、重要になるのが同じく坐摩神社行宮が旧地として充てられている渡部別所である。

渡部別所とは、東大寺大仏殿の再建に際し、重源が東大寺造営勧進を進めるために設けた建物であり、重源の宗教的・経済的拠点として位置付けられる。⁴⁰

渡部別所では迎講がおこなわれたことが史料上において確認でき、建仁三年（一一〇一）の迎講では後鳥羽上皇も御幸しており、かなり盛大に行われたことが分かる。そこで注目したいのが、そ

の際に八條女院が施入した頭成庄の対象である。⁴¹

渡辺頭成庄、自^三八條女院、自建^三仁元年、被^レ施^二入渡部浄土堂、念佛衆時料并佛性燈油料并王子御供料等了、

ここで「念佛衆時料」、「佛性燈油料」に並んで「王子社御供料」が出てくる。この王子は渡部という地名がみえる事からも窪津王子を指すものであると考えられ、窪津王子の管理に渡部別所が関わっていたことが分かる。⁴²管理をするにあたり、両者の距離が大きく離れているとは考えにくい。つまり、渡部別所の所在地を検討することにより、窪津王子の所在地についても検討することが可能になると言える。

まず、十二世紀当時の渡部別所の様子は以下の通りである。⁴³

渡部別所并木屋敷地 副各券文

浄土堂一字方三 間瓦葺

安置丈六皆金色阿彌陀三尊像

佛舍利

鐘假屋少々

二階九間二面倉一字

湯屋二于内 一于無亮大湯屋在大釜
一于別所小湯屋在湯船

ここで注目されるのが、渡部別所が「木屋敷地」として認識されていること、また「二階九間二面倉一字」と見えるように二階建ての大きな倉庫があったことである。



(図5 渡辺周辺図)

重源が建てた各地の別所の中でも、類似した「木屋敷地」があるのは渡部別所と東大寺近くの東大寺鐘樓岡浄土堂の「木津木屋敷」であり、東大寺大仏殿再建のための木材を置いたための場所であったと考えられている。⁴⁴

この木材は、周防国から調達されたものであり、切り出した木材は瀬戸内海を通じて難波まで運ばれている。⁴⁵

四月壬辰。佐々木左衛門尉参入。則召_二北面広庇_一。有_二御対面_一。東大寺仏殿柱已下材木。周防国柚出。殊致_二精誠_一之由。所_二聞食及_一也。汝匪_レ竭_二軍忠_一。已赴_二善因_一。尤神妙之旨被_レ仰。高綱申云。重源上人頻被_二相催_一。仍去月十八日。御柱十五本沙_二汰付河尻_一訖。此外十五本。早可_レ出_レ柚之由。示_二付代官_一云々。

難波まで運ばれた木材は、河川を通じて先に挙げた木津の木屋敷地まで運ばれ、東大寺に届けられる。その際、一時的に木材は難波に置かれたと指摘されており、木材が置かれた場所が渡部別所であった。⁴⁶

渡部別所がこのように木材の中継基地として使用されていることを考えると、渡部別所は高低差のある上町台地上よりも、利便性の高い港湾施設付近にあったことが推測される。一時的に保管された後に川を遡上させることや、大仏殿再建に使用される木材は大きなものであったと推測されることなどからも、河川に近い台地下にあったと考えるほうが自然である。

また、渡辺の港湾施設があったとされる大坂魚市場跡の発掘調査では、「東大寺大仏殿」と書かれた軒丸瓦が出土しており、同地周辺に東大寺再建に尽力した重源とのかかわりが深い建物があった可能性がすでに指摘されている。⁴⁸

これらを総合して検討した場合、渡部別所は上町台地下の港湾施設である渡辺に位置したことが推測でき、同時に窪津王子もこの付近に立地していたと考えることができる。

港湾施設と神社の立地関係については、第二章でふれた現在の琵琶湖北端部に位置する塩津が参考となる。

塩津港も京と北陸地方から東北地方を結ぶ重要な港湾であり、古代以来の交通の要衝であった。その脇に塩津神社が存在し、このルート上に位置する氣比神社・氣多神社と同じように港湾の神を祀る性格を持っていたと推定されている。⁴⁹ 塩津神社が位置する場所も古代・中世移行期に大きな環境変化があり、九世紀後半に一度水没するものの、十一世紀後半に再度再建され、十一世紀後半から十二世紀にかけて港湾に隣接する祭祀の場として継続して機能した。水没する以前もあわせてその性格は八世紀代まで遡るとされ、港湾にとって重要な祭祀の場としての性格は古代から中世にかけて継続的に維持されている。⁵⁰

塩津神社と窪津王子には共通する点が多く、窪津王子の淵源が港湾に坐す神としての性格を持つものであると仮定した場合、塩津神社と同じように港湾施設に隣接する場に王子社も立地していたと考えることができる。

ここまでの内容を踏まえ、本稿では窪津王子の所在地として、現在の上町台地上の坐摩神社行宮ではなく、台地下に広がる渡辺の中でも港湾施設に隣接する場に位置したとしたい。

おわりに

本稿では、窪津王子の淵源と、王子社が立地するまでの過程を考察した。

結論として本稿では①窪津王子の淵源には、古代の難波津や中世の渡辺津という連続性を持つ港を見守る港湾に坐す神のような存在が想定可能であること、②窪津王子が立地した背景には環境変化の影響があること、③窪津王子の位置は台地下にあたる港湾施設に隣接する場所に存在した可能性をそれぞれ指摘した。

全体を通して、窪津王子の成立背景には難波における気候変動による環境変化の影響が大きかったと言えます、また淵源に古代から連続する面を持ちつつ、熊野信仰という中世的な信仰へと変化していく過程を確認した。これは、古代から中世へと神観が大きく変わっていく中で、具体例の一つとして重要な視点であり、またその変化に古代・中世移行期の気候変動が大きく関わったことを示す事例でもある。

本稿では述べることができなかったが、難波と住吉社の関係も環境変化による変化を論じる上で重要である。土砂堆積は難波より以前に古代の水陸交通の要衝であった住吉の景観も変えており、その結果港湾機能も低下していく。今回論じた難波は、住吉の港湾機能が低下する時期と入れ替わるように港湾施設として機能するようになり、住吉からその機能が分化されたことも想定される。両者の比較を含め今後検証していくことにより、上町台地全体から古代・中世の環境変化の影響についても明らかにしたい。

注

- 1 難波は渡部や窪津など様々な名称で記されることが多いが、同じ場所を指すと考えて良い。王子社も同じように窪津王子のほか「渡辺王子」「大渡王子」など別の名称で記されることがこちらも同じ王子を指す。本稿では基本的に地名は渡辺に統一し、王子社については窪津王子に統一する。地名を含む名称のゆれについては以下に詳しい。河音能平「中世渡辺津の形成過程」（河音能平『大阪の中世前期』清文堂出版）二〇〇二、大村拓生「平安時代の摂津国衙・住吉社・渡辺党」（『難波宮から大坂へ』二〇〇六、同「中世渡辺津の展開と大阪湾」（『大阪の歴史』第七十号）二〇〇七、松尾信裕「古代・

中世の船場地域の景観」(『大阪歴史博物館研究紀要』第十六号) 二〇一八

2 柴田実「和光同塵―中世神道の基本概念―」(同『日本庶民信仰史 神道篇 柴田実著作集3』法蔵館) 一九八四、初出一九五九

3 拙稿「十―十二世紀における熊野王子社―その成立と展開―」(『神道研究集録』第三十五号) 二〇二二

4 『吉記』承安四年(一二七四)九月二十一日条。(『増補史料大成』以降傍線は筆者による。

5 『後鳥羽院熊野御幸記』建仁元年(一一〇一)十月五日条(『神道大系』)

6 『後鳥羽院・修明門院熊野御幸記』建保五年(一二二七)九月三十日条(『神道大系』)

7 津津の名は、院政期熊野参詣初期から多くの古記録に記され、参詣に関する史料では『扶桑略記』治安三年(一二三三)に行われた藤原道長の高野山からの帰途、国府大渡が津津と同地とされ、ここから乗船した記述が管見に触れたものの中では一番古い。

8 註3、拙稿(二〇二二)に同じ。

9 本図の作製には国土地理院地図、地理院タイル(標高タイル)を使用して作成した。(https://maps.gsi.go.jp/development/ichiran.html)

10 難波津の位置については、現在もその所在がどこであったのか多くの論がある。代表的なものとして、千田稔氏による三津寺町付近とする説、日下雅義氏による高麗橋付近とする説などが挙げられる。近年の発掘調査や、「上町科研」の報告などにより、現在は台地西北端部にあたる高麗橋・天神橋付近が有力な説となりつつある。本稿においても難波津の位置として、高麗橋・天神橋付近を難波津の位置として定義している。研究史については以下に詳しい。松尾信裕「古代難波の地形環境と難波津」(中尾芳治・榮原永遠男編『難波宮と都城制』吉川弘文館)二〇一四、西本昌之「古代難波津の歴史的変遷―難波御津(大津)から難波三津(御津)へ―」(『ヒストリア』第二八五号)二〇二二

11 註1、松尾文献(二〇一八)に同じ。

12 中大輔「文献にみる古代の運河・津」(鈴木康民編『日本古代の運河と水上交通』八木書店)二〇一五

13 戸田芳実「領主的土地所有の先駆形態」(同『日本領主制成立の研究』岩波書店)一九六七

14 註1、松尾文献(二〇一八)に同じ。

15 笹生衛『神と死者の考古学 古代のまつりと信仰』吉川弘文館、二〇一六

- 16 笹生衛「塩津港の神と神社」(水野章二編『よみがえる港・塩津』サンライズ出版) 二〇二〇
- 17 大阪市文化財協会編『大坂城下町跡Ⅱ』二〇〇四
- 18 積山洋「難波京の変容―奈良末から平安前期の様相をめぐって―」(『条里制・古代都市研究』第十八号) 二〇〇二
- 19 大阪市文化財協会編『住友銅吹所跡発掘調査報告』一九九八
- 20 古市晃「難波宮と難波津」(研究代表者、積山洋『東アジアにおける難波宮と古代難波の国際的性格に関する総合研究』大阪文化財協会) 二〇一〇
- 21 註16、笹生文献(二〇二〇)に同じ。
- 22 中塚武監修、伊藤啓介・田村憲美・水野章二編『気候変動から読みなおす日本史④気候変動と中世社会』臨川書店、二〇二〇
- 23 笹生衛「古代・中世の景観変化と気候変動―東京湾東岸における沖積平野の変遷を中心に―」(中塚武編『気候変動から読みなおす日本史④気候変動と中世社会』臨川書店) 二〇二〇
- 24 『日本書紀』仁徳天皇三十年九月十一日条(『国史大系』)
- 25 平川南「環境と歴史学」(『歴博』第七十五号) 一九九六
- 26 註23、笹生文献(二〇二〇)に同じ。
- 27 『本朝文粹』卷二、意見封事「善相公意見十二箇条」(『国史大系』)
- 28 『日本紀略』延喜十八年八月十七日条(『国史大系』)
- 29 『扶桑略記裡書』延長七年七月二十六日条(『新修摂津市史 史料と研究』)
- 30 『日本紀略』永祚元年八月十三日条(『国史大系』)
- 31 註1、大村文献(二〇〇六)に同じ。
- 32 註1、大村文献(二〇〇六)に同じ。
- 33 河角龍典「歴史時代における京都の洪水と氾濫原の地形変化―遺跡に記録された災害情報を用いた水害篠再構築―」(『京都歴史災害研究』第一号)

- 34 『日本紀略』長元五年六月条（『国史大系』）
- 35 『左経記』長元七年八月十二日条（『増補史料大成』）
- 36 『宇治関白高野山御参詣記』永承三年十月十一日条（『新修摂津市史 史料と研究』）
- 37 趙哲済「難波砂州北部～天満砂州南端部の表層地質に関する覚え書」（平成二一～二五年度（独）日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（A）『大阪上町台地の総合的研究―東アジア史における都市の誕生・成長・再生の一類型―』研究代表者、脇田修）二〇一四、趙哲済・中条武司「大阪湾海岸低地における古地理の変遷―「上町科研」以降の研究―」（『ヒストリア』第二六四号）二〇一七
- 38 『御室御所高野山御参籠日記』久安四年（一一四八）五月一日条（『新修摂津市史 史料と研究』）
- 39 註37文献、巻頭図版5、6
- 40 大山喬平「俊乗房重源の宗教的経済活動」（同『日本中世のムラと神々』岩波書店）二〇一二、初出一九九九
- 41 『南無阿弥陀仏作善集』建仁元年（一二〇二）九月二十一日条（『俊乗房重源史料集成』）
- 42 註1、大村文献（二〇〇七）に同じ。
- 43 『重源讓状』建久八年（一一九七）六月十五日条（『俊乗房重源史料集成』）
- 44 小林剛『俊乗房重源の研究』（一九七二）有隣堂
- 45 『吾妻鏡』文治五年（一一八九）六月四日条（『国史大系』）
- 46 註44、小林文献（一九七二）に同じ。
- 47 註17文献に同じ。
- 48 松尾信裕「大坂城下町跡下層の遺跡」（『大阪市文化財協会編『大坂城下町跡Ⅱ』）二〇〇四
- 49 註16笹生文献（二〇二〇）に同じ。
- 50 笹生衛「水陸交通の結節点―琵琶湖塩津港遺跡と神社―港湾における古代祭祀と中世への変質―」（古代交通研究会 第二十一回大会資料集『古代・中世移行期の交通と祭祀―北陸道・山陰道の水上交通・陸上交通を中心に―』二〇二一年六月二十六・二十七日開催。

